

2 - 3 吉野川の姿の変化

小規模な築堤や水害防備林だけでは、暴れ川を治めることは困難でした。吉野川の氾濫をある程度治めることができるようになったのは、連続した堤防を築いて以降です。それとともに、吉野川の景観も大きく変わり、川と人々とのかかわりも変化しました。

吉野川における本格的な治水事業の沿革は、明治40年に第一期改修事業に着手したのが最初です。岩津から河口までの約40kmの区間について、善入島を河道に編入し、堤防を築き、第十樋門を築造して第十堰下流における別宮川を本流とする等して、治水安全度が向上しました。このようにして、岩津から河口に至る約40kmの吉野川下流部の堤防が概成し、吉野川の河道がほぼ現在の姿になりました。

また、岩津から池田に至る上流部についても、昭和40年の新河川法の施工に伴い策定された工事实施基本計画に基づき、ダムによる洪水調節を取り入れるとともに、築堤に着手しました。築堤等の治水事業は、現在も続いています。

吉野川の姿には、これら治水事業のほか、砂利採取の影響など、いろいろな要因が影響を及ぼしています。

実際に吉野川の姿がどのように変化したのか、昭和３９年当時と平成１０年当時の空中写真を比較してみます。

築堤前（昭和３９年当時：岩津上流）



築堤後（平成１０年当時：岩津上流）



昭和３９年当時は堤防がありません。現在は築堤が進み、水害防備林としての竹林の機能は失われています。また、昭和３９年当時は、脇町潜水橋のあたりに中洲状の地形（舞中島）がありました。現在は堤防によって締め切られ、陸続きになっています。堤防の締め切りにより役割を終えた水害防備林は伐採され、跡地には家屋や耕作地がみられます。

池田周辺（昭和 3 9 年）



池田周辺（平成 1 0 年）



池田ダム周辺では、ダムの湛水によって流れが変化しています。

池田ダムが建設され、上流のダム群とともに洪水調節をするようになった結果、吉野川全体の流れの状況は変化しました。洪水のピーク流量が減少するとともに、渇水時にも最小限の流量が確保されます。

柿原堰下流（昭和 3 9 年）



柿原堰下流（平成 1 0 年）



昭和 3 9 年当時の川原には、植物が確認できません。砂利採取が大規模に行われていた時代です。現在の川原には、広い面積にわたって植物が確認できます。

高瀬橋周辺（昭和３９年）



高瀬橋周辺（平成１０年）



昭和３９年当時は、砂利採取が大規模に行われていました。現在は一部の区間を除いて、砂利採取は禁止されています。現在は、砂州の面積は広がっています。砂州の位置はほとんど変化していません。